思い出せない。思い出そうとする意志だけがある。

何故、今、自分がここにいるか。考えるだけ時間の無駄なのかも知れない。

時だけが過ぎて行く。記憶は忘却され、新たな場面がプリントされる。

身体が引っ張られた。瞬間的に私は悟った———作業着が機械に巻き込まれた事を。

懸命に私は抵抗した。しかし———

私は帰らぬ人となった。

……私は見た。光を。スターゲイトと思う。

私は抱いた。絶世の美女を。彼女は告げた。これから悲惨な目に遇う、と。

夢中で享楽を貪り、私は絶頂へ至る。下らない話。

お願いだから、この話は誰にもしないで、ね。私とあなたの約束。

それが私たちの関係。それが私たちの秘密……

ALL DOORS CLOSED

written by **HADEYA**

1

「報酬は100億———」
クライアントの男は確かにそう言った。目の飛び出そうな金額を。男が続ける。
「———ある情報を盗み出して欲しい」
「どんな情報を？」
男の向かいに着席した私は静かに問うた。静か過ぎるくらい静かに。
「データ化されていない物理情報だ。情報はマグリット社の金庫に厳重管理されている」

男との交渉を終え、私は駅構内を歩いている。契約は成立。ケタ外れの報酬の危険なヤマ。
危険には違いない。だが巨額の報酬が私の意志を左右した。
電車が到着し、私は乗車した。窓際に立つ。車窓に映る日本の景色を眺めながら。
申し遅れたが、私の名は田中麻理恵。職業は———

産業スパイ。

2

缶コーヒーを飲みながら歩いた。その時、異変が起きた。目の前で人が消えたのだ。砂煙のように忽然と消えた。
確かに、そこには人がいた。しかし何の前触れもなく消えた。異変が続く。
またしても人が消えた。またしても、またしても。次々と人が消えて行く……。
やがて視界から完全に人が消えた。同時に空間が歪んだ。高層ビルが歪曲し、地面が波打っている。

この時、私は知らなかった。ビッグ・クランチ———つまり宇宙が収縮する終焉形態が始まっている事を。
空間は歪みながら、ドンドン小さくなり……

3

「ぎゃあああああっ！」
悲鳴を上げた。宇宙を動かす歯車は私の両足を砕いている。それでもなお歯車は止まらない。
両足がつっかえ棒になって、歯車の動きは一時的に止まっているが。
足を見た。膝から白い骨が突き出ている。私は……動けなかった。両足を激痛が襲う。
歯車はミシミシと異音を立て、さらに突き進もうとしている。
私は完全に空間に挟まれていた。なおも空間は私を巻き込もうとしている。歯車が一段階、私を巻き込んだ。凄まじい悲鳴が闇をつんざく。

歯車は私の腰を噛んだ。歯車はさらにもう一段階、私を砕き……絶叫を上げた。動けないまま私は絶叫を続けた。

＊

全身を真っ赤に染めながら、なお私は悲鳴を上げている。
……これだけ出血すれば、普通は死ぬだろう。ところが死なないのだ。ここが異空間……どこか分からないからだ。

肩甲骨が大量の血液を製造する。白血球と赤血球、血小板を真っ赤な血液に流し込む。
真っ赤な血液は全身の血管を巡り、静脈から心臓へ送られ、右心房と左心房のポンプを経て大動脈へ戻される。
大動脈から血液は急上昇し、脳に流れ、流れ込んだ血液を脳動脈が吸う。私のニューロンが慌ただしく活動する。
ニュー ロンは中枢神経を伝う電気信号から苦痛を認識し、訴えている―――お願いだから助けて、と。
血液が溢れる。腹部からは内臓―――恐らく肝臓だと思う―――が飛び出ていた。

歯車は完全に止まったようだ。私が止めたのだ。止めてしまったのだ。息荒い呼吸を繰り返し、辛うじて私は生きている。
「お願い……し、死なせて……」
この時、私は諭した。前回の仕事の二重契約がクライアントにバレたのだ、と。
100億円の案件は私への契約違反の制裁であり、死を願いながら私はここで永遠を生きるのだ、と。

お願い、死なせて……私は懇願した。優美なキスをしながら私を葬って……願いながら、私はおぞましい悲鳴を上げ続けた。（了）

キリミハデヤ
hadeyakirimi@gmail.com
81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ　口座番号
三井住友銀行（店番号**232**）　普通口座　口座番号：**7342872**